

カリタス女子中学校 第四回入学試験

二〇二四年二月三日 実施

国語問題

(五〇分)

*答えはすべて解答用紙に記入すること。

*字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- | | | | | | |
|---|--------------------------|---|------------------------------|---|------------------------------|
| ① | 茨の道 ^い を歩む。 | ② | 悲願 ^い を果たす。 | ③ | 束 ^い になってかかる。 |
| ④ | ぐんと町 ^い が合併する。 | ⑤ | 健康はお金に勝る ^い さいさんだ。 | ⑥ | 遅刻 ^い しないようねんを押した。 |
| ⑦ | 果実 ^い が赤みをおびる。 | | | | |

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※のついている語は、文章のあとに語注があります。

【I】

漫画や映像と違って、小説は文字だけで物語を綴ります。絵も音声も映像もなく、読み手は文字を追いながら、自分の脳内のスクリーンに物語を映していきます。

脳内で物語を立ち上げていく力が、想像力なのです。

こう書くと、とても大変な作業に思えるかもしれませんが。

でも、あなただって日記やSNSの文章を書くとき、脳内でその日のことを映像的に再現しているはずです。

小説の場合は、それがあなたの話ではなく、「A」の話であるというだけのことです。

では、なぜ文字の羅列なのに脳内に映像が浮かぶのでしょうか。

小説には時代や場所の設定、登場人物の描写などがあって、文字を追っていくと、脳内のスクリーンに映るものがだんだんリアルになります。そこに会話や行動が加わることで、いきいきと人が動き始めるのです。

私は小学生のとき、『怪盗ルパン』シリーズに夢中になりました。

〈中略〉

とにかく面白かった。もう、わくわくドキドキの連続だったのを鮮明に覚えていきますし、小説家になろうと思ったきっかけも、この全集です。

二〇世紀初頭のフランスを舞台にした小説なんて、時間も場所も遠い世界の話で、実感が湧かない！と思うかもしれません。

でも、先ほど書いたように、文字を追っていくと、脳内のスクリーンで徐々に舞台や人の動きが鮮明になっていくのです。

数ページ読み進むだけで、読者は大昔のパリの街角に立っています。当時はまだ自動車が珍しく、辻馬車(馬車のタクシー)が通りを走っていて、街灯もガス灯だったりします。

文字を追いながら、必死でイメージを膨らませているうちに、主人公のルパンだけでなく、他の登場人物の姿も見えてきます。そんな

る頃には、小説の世界にとっぷり浸かっているというわけです。

小説には登場人物の言葉に加えて感情も書かれていますから、読者は感情移入しやすく、スリルや喜怒哀楽を登場人物と一緒に体感します。

1 面白いのは、脳内に映し出されるイメージが、読者の数だけあることです。

絵や映像があると、顔や姿はもうわかっているわけですから想像力に制限がかります。

でも小説なら、「屈強な男」とか「可憐な女」という表現をもとに、あとは読者が自由に想像するので、脳内に描かれる像は十人十色ですよ。

その自由さが、また楽しい。小学生時代、友達何人かと同じ本を読んで感想を言い合うと、みんな違うイメージを持っていたのに気づいてびっくりしたこともありました。

小説に書かれた文字を辿る、それを続けるだけで、あなたの想像力は鍛えられ、感性が豊かになり、思考が柔軟になります。

そして、豊かな想像力は、目の前の現実から未来をイメージしたり、実際に起きているのとは別の選択についても考えたりする力を与えてくれます。

あるいは、こんなことがあればいいな、と思い立って、じゃあ、どうすれば実現できるだろう、と考えるときにも役に立ちます。何より、想像力は他人を知るための大きな武器となるのです。

現代人は、どんどん想像力を失っていると言われています。欲しいものが何でも手に入るだけでなく、スマホを使って簡単に得られる画像や文字情報によって、知らないこともすぐに調べがつくからです。

本来、情報収集や他人を知ることが能動的なものです。現代では、欲すればたちまち手に入る受動的なものとなりました。

※ 知見を豊かにしたい、誰かのことを知りたいと思ったとき、自ら積極的に情報収集をした場合と、第三者から情報を提供された場合とは、吸収度が違います。

能動的な情報収集は、本質やホンネ、真実を知るための鍵になる要素です。

ですから、私が誰かを取材する場合は、まずその人について書かれた文字情報をしっかりと読み、ある程度イメージを膨らませた上で、画像や映像を見るようにしています。

すると、相乗効果が生まれ、より深く相手を把握できるのです。

文字情報を追っけていても想像力が足りなければ、把握がうまくいかず、本質やホンネを見落としてしまいます。

2

想像力が大事なのですが、これは勉強で身につくものではありません。日頃の想像する習慣が物を言います。そこで、楽しみながら想像力を養うために、小説を読もうというわけです。

【II】

小説を読むと、たいていは登場人物の誰かに感情移入することになります。こうしてますます小説の世界にのめり込む。それこそが、読書の醍醐味です。

この面白さにはまると、大袈裟ではなく、テーマパークのアトラクションより楽しい経験ができます。

小説の登場人物に感情移入して読み進めるといえるのは、その人物の人生を生きることと等しい。無論、フィクションの世界での話ですが、読んでいる間は、あなたと登場人物は一心同体です。

小説の舞台がニューヨークであれば、あなたもニューヨークで暮らしている。明治維新の小説なら、^C 激動の時代を体験することになるのでしよう。切ない恋愛小説なら、どうやって相手に告白しようかとドキドキするでしょうし、すれ違いを歯がゆくも感じるでしょう。

こうして登場人物になりきっている間、実生活では絶対にわからない他人の人生を、自分ごととして感じ取っているはず。これは、すごく貴重な体験です。

当たり前ですが、あなたの人生は一つしかなく、やり直しはきかない。しかも、大半は自分で選べない環境で生きています。おそらく長い人生では、たくさん後悔するでしょうし、失敗もするでしょう。

でも、いろんな経験を積んでいたら、そういう失敗を回避できるかもしれません。

小説なら、たとえ夢中になって読んでいても、登場人物に降りかかる出来事は自分の人生ではないので、失敗しても傷つくことはありません。

と同時に、一緒に体験したわけですから、経験は我が物となっています。

自分の人生は後戻りできませんが、小説なら、あのときこうすれば良かったと振り返ることができません。

未来は誰にも予想がつかず、「絶対」なんてありえないと頭では理解しても、日々の暮らしてそのことを考える余裕に恵まれない。ですが、小説を読んでいるときは少し余裕があるはず。このままだと、あの登場人物と同じことが起きそう、と予測できる場合だってあるでしょう。

人生は一度きりです。でも、小説を読めば読むほど、多くの人生を疑似体験することになりますから、たくさん的人生を味わえます。

それもまた、小説の魅力なのです。

極めていけば、人生経験の豊かな大人より、人生について理解が深くなるかもしれません。

膨大な情報を受け取りながら絶え間なく続く日常生活の中で、立ち止まって違和感を確かめたり、確信が持てるまでじっくり考えたりするのは、容易ではありません。

3、そういう時間を持つことはとても大切です。

小説なら、読むのをやめることによって主人公の時間を止められます。

そして、情報を整理したり、感じた違和感について考えたりすることもできます。

考えるために読むのをやめるといえるのは、実生活では、立ち止まって自分のことを客観的に見つめる姿勢につながります。

つまり、どっぶり感情移入しているときには見えていなかったものが、本から離れると見える。

この人はだまされているんじゃないの？ とか、なぜ違和感があるんだろう、と分析しているとき、登場人物や出来事を客観的にとらえているのです。

感情移入もできるし、その人物をドライに分析し批判^{ひはん}できる。それが小説の良い点なので、実人生でもそんなふうに分を客観視できるといいですよ。

そうすれば、失敗が減ります。たとえ失敗しても、それを冷静に分析する方法を身につけていたら、同じ失敗を繰り返さなくなるかもしれない。

実際のところ、多くの人が自分を客観視できずに失敗を繰り返しています。それどころか、「これが私の人生だから」と開き直ります。客観視するには本人の自覚が必要で、習慣づけなければ、我が物となりません。スポーツ選手が、繰り返し練習して体に覚えさせるのと同じです。

客観視の習慣のためにも小説を読んでほしいと思います。

小説を読む上で、私が最も重要だと考えているのは、多彩^{たさい}な価値観を体験できる点です。

小説には、様々な登場人物が現れます。価値観も多種多様です。

そもそも主人公の価値観が、あなたとびったり同じである小説は珍しいはず。

ですが、小説をたくさん読むようになると、「今回は、共感できない性格の人だけど、あえてそういう自分になってみよう」という実験もできるようになります。

たとえば、主人公が男性だからといって、女性を読めないわけではありませんよね。あるいは、殺人鬼^{ざつじんき}が主人公のミステリだとすれば、殺人鬼の考えに触^ふれたことをきっかけに、^E今まで見たことのなかった世界が広がるでしょう。

主人公以外の登場人物からも、性格や考え方が各人で異なる、つまり多様性があることが、より具体的にわかるはず。

実生活で、価値観がまったく違う人と出くわしたら戸惑^{とまど}うでしょう。そんなとき、もし似たようなキャラを小説で読んでいたら、ああ、こういうタイプには、こう対応したらいいんじゃないかとひらめくかもしれません。

〈真山仁『正しい』を疑え!〉(岩波ジュニア新書)より

〔語注〕

※羅列^{られつ}……………連ねて並べること。

※知見……………実際に物を見たり聞いたりして、知ること。

※相乗効果……………ある要因と、その他の要因とが同時に働いて、個々の要因が一つだけでもたらす以上の結果を生むこと。

※醍醐味^{だいごみ}……………物事の本当のおもしろさや、深い味わい。

問一

1 2 3 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えな

さい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア だからこそ イ たとえば ウ さらに エ でも

問二 「A」に入る語を本文中から漢字四字でぬき出して書きなさい。

問五

C 激動、D 容易 と同じ組み立てになっている熟語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア 卒業 イ 動静 ウ 保養 エ 臨海 オ 軽視

問六

筆者は【Ⅱ】の部分で、「小説を読むこと」の意義を挙げています。その説明としてもっともふさわしいものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 未来はだれにも予想がつかないものだが、小説を何作品も読むと、複数の作者たちから人生経験とは何かを教えてもらえるので、未来に自分がしてしまいそうな失敗をあらかじめ想定しておくことができる。

イ 魅力的な小説を読むと、登場人物に降りかかる悪い出来事もまるで自分自身に起こったことのように感じてしまうので、読んでいる自分も傷つき、それが自分と登場人物のことを冷静に分析するきっかけにもなる。

ウ 小説を読んでいる時には登場人物になりきる楽しさを味わえる一方で、読むのを中断すると読んでいた時には見えていなかったものに気づくことができ、実生活でも自分を客観的に見つめる姿勢を持てるようになる。

エ 登場人物が失敗をする小説は多いので、たくさん的小説を読むことによって、失敗することが特別にこわいことではないと気づき、実生活で何度失敗をしても開き直すことで、広い世界にふみ出し、多彩な経験を積むことができる。

オ 人生は一度きりだが、小説を読むことで自分とは別の人生を疑似体験できるため、自分とは性格や考え方が異なる人物がいることを知り、今の自分自身の性格や人間性を変えて、別の人生を送ろうという気持ちが強くなる。

問七

E 今まで見たことのなかった世界が広がるでしょう。とあります。このあとの【三】に出題されている物語文を読んだことで、あなたにとってどのような「今まで見たことのなかった世界」が広がりましたか。また、その経験を今後自分の生活にどのようなようにいかしていきたいと考えましたか。二点を書きなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※のついている語は、文章のあとに語注があります。

「わたし」（小柳沙織^{こやなぎ さおり}）は、小学六年の時から学校に行っていない。中学へ入学しても一年以上学校へ行けない日々が続いていたが、世間では新型コロナウイルスが流行し、全国の学校が一斉^{いっせい}休校となる。

学校に行けないまま中学二年に進級し、緊急事態宣言^{きんぎょう}が発令される中、「唯一^{ゆいいつ}のライン友たち」である「沙織」の「おじいちゃん」から、「女優になりきって学校へ行け。劇のタイトルは『別人28号』だ。」という内容のラインが届く。「おじいちゃん」は元舞台俳優^{ぶたい}だった。

緊急事態宣言は、五月三十一日まで延長になった。でもこのまま感染者数^{かんせんしゆ}が減っていけば、学校は早めに始まるみたいだ。結局、リモート授業なんかしなくてもだいじょうぶだったってことだ。

世の中はちゃんと回っていく。止まっているのは、わたしだけだ。

考えてたら、ラインの着信音がした。

「今度こそ女優になるときだ」

またか……。

「いいかげんにして。」

って打ったら、

「こんなチャンスを見逃^{みのが}すなんてアホのすることだ」

「みんながぼんやりしているうちにちゃっかりクラスにとけこんじまえばいいだけだ」

「もぐりこんじまえ」

次々とメッセージが送られてくる。

「女優になれ自分は別の人物だと思いきめ」

思いきめと言われたって。

わたしが思いきんだって、他の人は別人だなんて思わない。

マスクしたくらいじゃ、すぐにバレるよ。」

どんなに大きなマスクだって、限界がある。

そのとたん、電話が鳴った。ラインの音声通話だ。おじいちゃんからだ。

しばらくながめてたけど、

「違う、違う。」

声がした。

「耳、離して。」

画面を見ると、おじいちゃんが手を振ってた。

「テレビ電話にして話そう。」

「ビデオ通話って言うんだよ。」

偉そうに言ったけど、ラインで通話するのは初めてだ。画面には、わたしの顔とおじいちゃんの顔がならん。

「やっぱりな。」

おじいちゃんは、言った。

「予想通り、顔が変わっとる。」

「顔、変わった？」

わたしは、自分の顔を手のひらでなでた。

「痩せて、顔の大きさが、前の半分くらいしかない。」

「そんなことないよ。」

痩せたけど、三キロくらいだ。

「背が、伸びただろ。だから、細う見える。」

もしかしたら背は、伸びたのかもしれない。

「そんだけ痩せたら、誰かわからん。」

おじいちゃんは、満足そうだ。

でも、わたしから見たら、わたしはどう見てもわたしだ。

「お前、メガネはないのか。」

「持っていない。」

少し近眼だけど、メガネはなくても平気だ。

「ダテでも何でもいい。メガネを準備しろ。」

「ダテ？」

「格好だけってことだ。レンズの度は入ってなくてもかまわん。」

おじいちゃんは、言った。

「そんだけ痩せて、メガネかけて、マスクしたら、絶対に別人だ。」

それが「別人28号」ってこと？

「お母さんにメガネ屋に連れてってもらえ。」

「でも……。」

「**2** 言わんと、とにかく一回別人になりきってみろ。お前には、役者の血が流れとる。」

おじいちゃんは、自信満々だ。

「そんなことしたって……。」

「格好を甘く見るな。舞台衣装を着けたとたん、役の魂が乗り移るんだ。お前も、姿形を変えたら、別の人物になれる。」

わたしが返事に迷っているうちに、プツツとビデオ通話は切れた。

もう、言いたいことだけ言って……。

ゴールデンウィークが明けると、先生がプリントを届けてくれた。

五月二十一日から、「分散登校」というのをやるらしい。一クラスを半分に分けて、午前と午後に分ける。わたしは、午後のクラスになっ

ていた。午後のクラスには、知っている名前はひとつもなかった。

今までだったら、こんな情報は軽く目を通すくらいだった。

でも、気がついたら、プリントをしっかりと読みこんでた。

「メガネは買ったか」

おじいちゃんから、ラインが来た。

「まだ。」

メガネをかけたところで、別人になりきれれる保証はない。^{*} リモート授業みたいなのに、世の中のたいていのことは、うまくいかないようになつてる。

B 「外見を変えて学校に行つたとしてもすぐバレるだろうし、やめとけばよかったって後悔するかもしれない。」

外見を変えて登校したことで、かえっていじめられるかもしれない。けど、

「後悔する前から後悔を怖がるな」

おじいちゃんは、ひるまなかつた。

「行つても行かなくてもきつと後悔するだつたら言つてつてから後悔して方がいいじゃないか」

よっぽど急いだのか、誤字がいっぱい。

読んでる間に、また来た。

「とにかくメガネを買つてみる学校に行くかどうかは後で考えても言い」

また、誤字。

「……そこまで言うなら、メガネ、買ってみようかな。」

下に行くとお母さんは掃除機をかけてた。

「お母さん。」

わたしが声をかけると、^C すぐに掃除機の電源を切った。

「あの……さ、メガネが欲しいんだけど。」

お母さんは、目を丸くした。

「遠くのもの……見えないから。」

あやしまれるかと思っただけど、

「そうか。じゃあ、作らなくちゃ。」

D お母さんは、がちがちと掃除機を片付けた。

「すぐに行こう。」

E あんまり反応が早くて、びっくりした。

「沙織も早く着替えて。」

いつものことだから気にしてなかったけど、バジヤマだった。部屋にもどろろとしたら、お母さんが階段の下で大声を出した。

「服、ある？ みんな小さくなってているんじゃない？」

そんなこと……と思っただけど、お母さんの不安は的中した。どの服もサイズが合わなかった。丈が短い。

「やだ。なんで気づかなかったんだろ。」

お母さんは頭を抱えた。

唯一、セーラー服だけは、大きめに作ったからだいじょうぶだった。まだ一回しか着てないから、ほぼ新品だ。

「スカート、長さはいいけど、ウエストがぶかぶかだね。よしっ！ ピンで留めちゃおう。」

お母さんは、ひざ立ちになりながら、ピンで留めてくれた。

「沙織、ずいぶん痩せちゃったね。」

お母さんが、3 言った。

「前が太ってただけだよ。」

見下ろしたら、お母さんはしきりに頬をぬぐってた。泣いてたんだ……。

罪悪感で、胸がいっぱいになった。

こんなことで、お母さんを泣かせてる。

〈中略〉

お店はガラガラだった。わたしたち以外、お客さんはいない。メガネは、不要不急なのかもしれない。メガネ屋さんのお姉さんは、「お休みの間に、作っておくといいですよね。」

と、愛想よく応対してくれた。

「最近、こういうのがよく出てますよ。」

次々にいろいろなフレームを出してくれた。お母さんは、

「これがいいんじゃない？」

とか、

「やっぱり、細いフレームがすっきりしてるわよね。」

とか次々に手に取った。わたしは、すすめられるまま、かけていった。

「どれでも、沙織が一番いいのを選びなさい。」

「お金は気にしないでいいのよ、と太っ腹だ。」

ちよつと悩んだけど、できるだけ普通のを選んだ。

〈中略〉

できあがったメガネを受け取り、改めて鏡の前でかけてみる。

「すごくお似合いですよ。」

おおげさにほめるメガネ屋さんのお姉さんの横で、

「うん、いいわあ。」

お母さんも微笑んでいる。でも……。

目の前が真っ暗になっていくのを感じてた。

ああ、そうだった。

痩せて、メガネをかけて、マスクをしても、それでも、だめだ。これじゃ、すぐにバレちゃう。

この髪の毛。

『髪の毛で、すぐわかった。』

※真由の含み笑いが、頭に蘇った。

この縮れた髪の毛は、名札よりも明確にここにいるのが「小柳沙織」だと主張する。

何、調子に乗ってたんだろ。別人になんてなれるはずないのに。

おじいちゃん、わたしは、やっぱり別人にはなれないよ。

お腹の中に、重たい石ころがごとんと滑り落ちた。

〳〵別人28号のことなんだけど。〳〵

H 今日、わたしからラインした。

〳〵やっぱり無理。メガネも買ってみたけど、どう見てもわたしだから。〳〵

いつもなら、すぐ返信が来るのに、今日に限って来なかった。ようやく返信が来たのは、翌朝だった。

〳〵まだ大切なことをしてない〳〵

おじいちゃんは、言った。大切なこと？

〳〵神木らんといかん〳〵

神木らん？ 誰？

〳〵びよういんで短くしてこい〳〵

次のメッセージを見て、「神木らん」は「髪切らん」だと判明。

〳〵おじいちゃん、わたし、髪は短くできない。切ると爆発したみたいになっちゃうから。〳〵

すると、すぐに返事が来た。

〳〵最初から縮毛矯正させるつもりだった〳〵

縮毛矯正？

〃薬で真まっ直すぐにする〃

〃パーマは禁止だよ。〃

あわてて返した。

おじいちゃんは、考えているみたいですがすぐに返事は来なかった。十分後くらいに、

〃パーマと違う〃

と言いつ返してきた。

〃どう違うの？ 薬つけるんだよね？ ストレートパーマじゃないの？〃

何かやりながらなのか、今日は、4返事に時間がかかる。待っている間に、メッセージを書き始める。

〃校則違反いはんはしたくない。また何か言われちゃう。〃

〃やっぱり無理。別人になんてなれない。〃

打うつてる最中さなかに、ようやく、

〃知らん〃

という返事が届いた。これは「ストレートパーマとどう違うか知らない。」ってこと？ 次に、

〃行けない理由を探すな〃

と来た。ムツとした。

〃探してなんかない。〃

すれちがうように、おじいちゃんからも来た。

〃最初のセリフはおはようだ〃

おはよう？

〃マスクをつけた沙織が教室の戸を開けて言う〃

〃おはよう〃

〃そこから劇はスタートする〃

おじいちゃんの頭の中で、劇が作られていく。

〳〵一幕の沙織は自分に自信がなくておどおどしてる〳〵

〳〵けど二幕目からは本来の自分に戻っていく〳〵

〳〵ちゃんと人物像を作っておけ〳〵

もう。

〳〵わたし、女優じゃないよ。〳〵

反論したけど、その後メッセージは返ってこなかった。

いつつもう。言いたいことだけ言って終わるんだ。勝手なんだから。

ほら、このときも、このときも。

〈 中 略 〉

一週間ほどして、「おじいちゃん」が亡なくなったという知らせが入る。実は、「おじいちゃん」は入院先から「沙織」にラインをしていたのである。

葬儀そうぎの場で、「おばあちゃん」から、「沙織」の縮れた髪の毛は「おじいちゃん」譲りゆずだったと聞く。

わたしは、棺ひつぎの中のおじいちゃんの髪に手を伸ばした。

この髪の毛、おじいちゃん譲りだったのか。

「おじいちゃんとは、一週間くらい前までラインしてたんだよ。でも、一回も体調が悪いなんて言ってなかったのに。」

ポケットからスマホを出して、あれっと思った。

ラインのマークの上に①とついている。未読のメッセージがあるってこと。

誰から？ いや、ラインを送って来る人はひとりしかいない。

日付は、四日前だ。

全然、気づかなかった。

メッセージは、もちろん、おじいちゃんからだ。

初舞台の拳闘を祈る^{いの}

拳闘？ これじゃ、殴りこみに行くみたいだよ。

「あ、そう言えば……。」

おばあちゃんは、思い出したように言った。

「今朝、おじいちゃんのスマホに電話がかかって来たんだよ。沙織にはかかって来た？」

何のことかわからなくて、首を横に振った。

「沙織の担任の先生から。縮毛矯正の許可がありましたからって。」

縮毛矯正？ 許可？

「おじいちゃん、学校にお願いの電話をしたみたいだね。」

わたしは、おじいちゃんのスマホを受け取って、履歴を見た。何度も中学校にかけていた。もう、おじいちゃんてば……。

涙が、あふれてきた。

縮毛矯正をしに行こう。メガネをかけ、マスクをして、身支度を整えるんだ。

「別人28号」主演・小柳沙織

テーマ曲は『風に吹かれて』^{*}

舞台初日まで、あとわずかだ。

〈山本悦子『マスク越しのおはよう』（講談社）より〉

〔語注〕

※『別人28号』……………『鉄人28号』という漫画^{まんが}、ドラマ、アニメ作品を「おじいちゃん」がもじったもの。

※リモート授業みたいに……………これより前の場で、リモート授業であれば自分も家にいながら授業に出られると沙織は期待したが、結局リモート授業は行われず、落胆^{うくたん}したことをふまえている。

※真由……………「沙織」の小学校時代のクラスメイト。

※『風に吹かれて』……………アメリカのミュージシャン、ボブ・ディランの曲。「おじいちゃん」の好きな曲で、おじいちゃんが「別人28号」のテーマソングとして選んでいた。

問一

1 4 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～クの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア いちいち イ てきばき ウ つべこべ エ しぶしぶ
オ どたばた カ さらりと キ ぼつりと ク じつと

問二

A 舞台衣装^{いしやう}を着けたとたん とありますが、ここでの「わたし」にとつての「舞台衣装」とは何ですか、本文中からぬき出して、すべて書きなさい。

問三

B 外見を変えて学校に行ったとしてもすぐバレるだろうし、やめとけばよかつたって後悔^{こうかい}するかもしれない。とありますが、「沙織」はこのように「おじいちゃん」に言いながらも、これより前の部分で、学校に行きたい気持ちが行動に表れているところがあります。それがわかる一続きの二文をぬき出し、はじめの五字を書きなさい。

問四 C すぐに掃除機の電源を切った。 D お母さんは、がちやがちやと掃除機を片付けた。 E あんまり反応が早く、とありますが、

なぜ「お母さん」はこのような反応をしたのでしょうか。ここにあらわれている「お母さん」の気持ちを考えて、その理由を説明しなさい。

問五 F 太っ腹だ を言い換えた次の表現の、 にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。

気 がいい

問六 G ちょっと悩んだけど、できるだけ普通のを選んだ。 とありますが、ここにあらわれている「わたし」の気持ちを二十字以内で書きなさい。

問七 H 今日は、わたしからラインした。 という行動、いつもなら、すぐ返信が来るのに、今日に限って来なかった。 の言葉から、「沙織」が「おじいちゃん」の反応や返信を待っていることがわかります。「沙織」は「おじいちゃん」からどのような内容の返信を期待していると考えられますか。自分の言葉でわかりやすく説明しなさい。

問八 本文から読み取れる「おじいちゃん」の人物の説明としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 常に先を読んで行動し、沙織のためになるよう計画的に事を進めるすきのない人物。

イ おもしろいアイデアの持ち主で、沙織が自ら考えて動けるよう提案してくれる人物。

ウ 孫に深い愛情をいだいており、いつも沙織のペースに合わせて相談に乗ってくれる人物。

エ 少し口は悪いが、沙織の悩みにおおらかに耳を傾けつつ自らのことも包み隠さず話す人物。

オ やや強引なところがあるが、孫思いで、沙織が一步踏み出せるよういろいろと手を尽くす人物。

